

史跡 長州の役戦跡「苦の坂」

ここは西国街道苦の坂です。木野側^{この}に四町九間（四百五十三メートル）の急坂をもつこの天険は、古くから大河原山・立戸山^{たちど}とともに防長に対する戦陣の適地として注目されました。芸防の国境がにわかには戦雲につつまれ、二分された国論を背景に幕府軍と長州軍が小瀬川をはさんで合戦の布陣を終わったのは、慶応二年（一八六六）六月十三日でした。幕府方は正面軍として、彦根藩の主力及び高田藩の一手を大竹口に配し、側面軍として高田藩の主力を立戸からこの苦の坂に進めました。

これに対し長州軍は、本藩の一手と岩国藩の主力を幕府正面軍に對置し、本藩の有力な遊撃軍を要所に配して機会を待ちました。翌十四日明け方、幕府正面軍の先攻により合戦の火ぶたが切られました。長州軍は直ちに烈しい砲火と銃撃をもってこれに応じました。遊撃軍も未明に行動を起こし、まずは住民の立退いた中津原^{なかつわら}に侵入し、ここで部隊を二手に分けて、一手は幕府正面軍の側面に向かい、一手は小瀬村小原道を進んだ他の一隊と共同して、幕府側面軍の主力に攻撃をかけました。この苦の坂をめぐる両軍の攻防は、烈しい白兵戦でした。遂に勝敗は決し、勝を制した長州遊撃軍は更に立戸山に進出して幕府正面軍の背後を押さえました。そのため、この時すでに敗退しつつあった幕府正面軍も退路を断たれて総崩れとなり、逃げ遅れた多くの兵士を残して船で遁走^{とんそう}しました。